人間は遊ぶために生きている。
学校なんか行かなくたっていい。
うそをついてもいい。
クジラは魚だ。
地球は丸くない。
……。

ペネトレはこんなことを言うんだけど、どう思う？

「ペネトレ」っていうのは、三年前、ぼくが小学五年生のときから、ぼくの家にすみつくようになった猫なんだ。

名前もへんだけど、そのほかの点もすごくへんで、なによりもおかしいのは人間の言葉を話すことだ。それに話す内容も変わっている。ふつうの人が言うようなことは絶対に言わない。ペネトレが、「おなかがへったよ」とか「ねむいなあ」なんて言うのは、いちども聞いたことがない。「人間はなんのために生きているのか」とか「学校には行かなくちゃいけないのか」とか、そういう問題について自分の意見を言うん

だ。

意見の内容もふつうの人とはぜんぜんちがうんだよ。最初はちょっとびっくりするけど、よく考えてみると、ひょっとしたらペネトレの考えのほうが正しいんじゃないかって思えてくる。

この本は、ぼくとペネトレとの対話の記録なんだ。対話といっても、ほとんどペネトレがひとりでしゃべって、ぼくは聞いているだけっていうのもあるけどね。

それぞれの対話は実際に話した順番にならんでいるから、最初から読んでいったほうがわかりやすいかもしれないけど、順番を無視して、おもしろそうなところから読んでいってもかまわないよ。でも、題のあとに（1）（2）という番号がついているところは、話の内容が続いているから、（2）を読むまえに（1）を読んでおいたほうがいいと思う。それと、とちゅうで（↓第2章―7）というような記号がでてきたら、第2章の7のところに、関係のあることがでているって意味だからね。

第1章　人間は遊ぶために生きている！

ペネトレ　　ぼ゛く

1　人間はなんのために生きているのか？（1）

ぼく：ねえ、ペネトレ、人間ってなんのために生きているんだろう？　たとえばお父さんを見ているとね、毎日毎日、仕事ばっかりしているけど、仕事ってお金をかせぐためにするんでしょ？　お金をかせぐのは、お金がないと生きていけないからだよね？　お金がないと、食べるものや着るものも買えないし、いろんな娯楽もできないし……。でも、お父さんを見ていると、そういう、生きていくために必要だからやっているはずのことが、生きていくことそのものになっちゃっているような、なんだかへんな感じがするんだけど……。

ペネトレ：生きていくための手段であったはずのことに、生きていく時間の大半をつかっちゃっているってことだね？　でも、人生はね、目的と手段をはっきり分けることができないんだよ。手段であったはずのことが、いつのまにか目的そのものになっちゃうってことこそが、人生のおもしろみなのさ。

ぼく：手段であったはずのことが目的そのものになっちゃう……？　でも、その目的

っていったいなんなの？　人間って結局はなんのために生きているの？

ペネトレ：結局は、……遊ぶためさ。仕事をしてお金をかせぐのも遊ぶためなんだけど、その仕事が生きていくことそのものになっちゃうのは、その仕事そのものが遊びになっちゃったってことなんだよ。それはちっともへんなことじゃなくて、とてもいいことなんだよ。

ぼく：人生の目的は遊ぶことだって言うの？　世の中のためになるとか、なにかりっぱな仕事をするとか、そういうことじゃなくて？　ただ遊ぶため？

2　人間はなんのために生きているのか？（2）

ぼく：一生ただ遊んで暮らすなんて、なんだかかえってつまらないような気がするんだけど……。やっぱり、なにかある目標のために努力する人生のほうが、充実しているんじゃないかな？

ペネトレ：世の中の人は、仕事をすることと対比して、「遊ぶ」って言葉をなにもしないでぶらぶらしているって意味につかうからね。でも、ぼくのいう「遊ぶ」ってことはそういう意味じゃないよ。「遊ぶ」っていうのはね、自分のしたいことをして「楽しむ」ことさ。そのときやっていることの中だけで完全に満ちたりている状態のことなんだよ。そのときやっていることの外にどんな目的も意味も求める必要がないような状態のことなんだ。つまり、なんのためにでもなく生きている状態だな。ただそれが楽しいから遊ぶんで、それによってなにが実現されるからでもないんだよ。

ぼく：そうだとすると、人間は、なんのためにでもなく生きるために生きているってことにならない？　そんなの、ちょっとへんだな。

ペネトレ：ちっともへんじゃないさ。でも、なんのためにでもなく生きるために生きているうちは、なんのためにでもなく生きることはできないけどね。

ぼく：じゃあ、どうすればいいのさ？

ペネトレ：なんのためにでもなく生きるために生きているってことそれ自体が、なんのためにでもなく生きていることになればいいのさ。

ぼく：？？？（→第２章―７）

7　いやなことをしなければならないとき（1）

ぼく：いやなことをどうしてもしなくちゃならないとき、どうしたらいい？

ペネトレ：いやなことって？　勉強とか？

ぼく：そうじゃなくて、人にあやまらなくちゃならないとか、たのみにくいことをたのまなくちゃならないとか、そういうときのことだよ。

ペネトレ：そんなこと、たいしたことじゃないさ。

ぼく：ぼくにとっては、重大なことなんだよ。

ペネトレ：まあ、コツはあるよ。まず第一に、そのことが正当なこと、すべきことであることを自分に言い聞かせる。それが終わったら、第二に、じゃあやろうかな、と思って、ちょっと待っているんだよ。力をぬいてね。そうすると、すーっとやれるときがくるんだ。そのときがくるのをただ待つんだよ。たいせつなことは、ふとやってみるってことだよ。「ふと」っていうのは「不図（ふと）」ってことで「意図なしに」っていう意味なんだよ。**意図なしに、ふとやれる瞬間（しゅんかん）がくるのを待つんだ。**なれてくると、

人生全体をふと生きることができるようになってくるからね。そうなれば、しめたものさ。

ぼく：そんなこと、できるかな。

ペネトレ：まずは、なにか言うときに練習してみるといいね。言うときなら、ふと言ってみるときに「ふと思った」って言っちゃうことができるからね。そういうふうにして、人生全体から小さな作為（さくい）をすこしずつ取り去っていくんだよ。そうすると最後には、いやなことなんて、なくなっちゃうさ。

ぼく：そうかなあ……。

8　いやなことをしなければならないとき（2）

ぼく：ほんとう言うとね、勉強もいやなことのひとつなんだけど……。ふとやるっていうやりかたは、勉強のときにもつかえる？

ペネトレ：もちろんつかえるさ。やりかたはおなじだよ。なんでもそうなんだけど、する量の全体を考えないで、とにかく、まず、やりはじめてみることだね。つまり、**なにかをやりとげようとしないで、ただ、やりはじめようとするんだよ。やりはじめるだけでいいって考えるんだよ。**

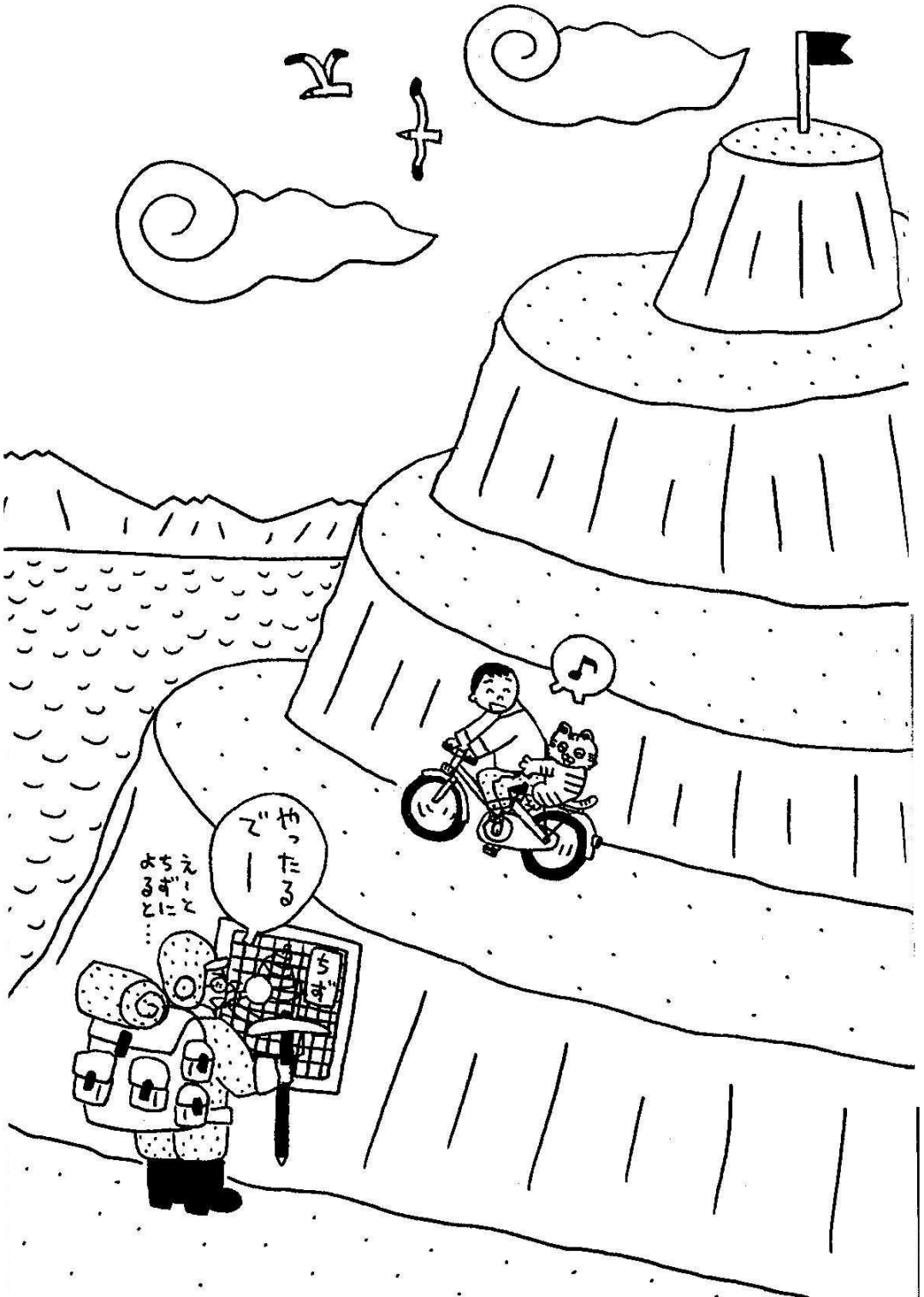
ぼく：でも、それだと、やりはじめても、なにもやりとげないうちに、すぐにいやになって、やめちゃうかもしれないじゃん。

ペネトレ：ふと続けていけばいいのさ。

ぼく：……？

ペネトレ：それから、やめかたのコツもあるよ。

ぼく：やめかたのコツ？



ペネトレ：どんなしごとでもそうなんだけど、なんとなく調子が出てきて、もっと続けたいと思うところでやめるのがコツだな。

ぼく：ひと区切りついたところでじゃなくて？

ペネトレ：そうだよ。区切りがついたところでやめると、あとでまた続けるのに力が必要になるからね。区切りがつかないところでやめて、そのしごとの中に持続力を残しておくほうがいいのさ。

9　なぜ勉強しなくちゃいけないのか？

——さらにまた、ネクラとネアカについて——

ぼく：そもそも勉強って、なんでしなくちゃならないの？

ペネトレ：そりゃあもちろん、遊ぶためさ。将来、より楽しく、より深く、人生を遊びきるために、いま勉強しておくことが必要なんだ。人生全体を考えに入れたとき、いちばんよく遊べるために、いま勉強しておくのさ。

ぼく：遊ぶためだけなら、勉強なんかぜんぜんしなくたって、じゅうぶん楽しく遊べるんじゃないかなあ。それに、どうせ遊ぶためなら、将来遊ぶより、いま遊んじゃったほうが、ずっといいじゃん？

ペネトレ：まえに、ちゃんとした人とどうしようもないやつの区別をしたの、覚えてる？（→第1章—3）ちゃんとした人っていうのは、自分の未来のために自分の現在を犠牲にできる人のことなんだ。逆に、自分の現在のために自分の未来を犠牲にしちゃうのがどうしようもないやつさ。ついでにいえば、他人のために自分を犠牲にでき

|著者| 永井 均　1951年東京都生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得。専攻は哲学・倫理学。千葉大学教授などを経て、日本大学文理学部哲学科教授。著書に『マンガは哲学する』（岩波現代文庫）、『翔太と猫のインサイトの夏休み』（ちくま学芸文庫）、『私・今・そして神』（講談社現代新書）などがある。

|画家| 内田かずひろ　1964年福岡県生まれ。90年『シロと歩けば』（竹書房）でマンガ家としてデビュー。著書に『ゆうぐれアーモンド』（集英社）、『ロダンのココロ』（朝日文庫）などがある。
ブログ　http://rodakoko.exblog.jp

子どものための哲学対話
永井 均 | 内田かずひろ 絵
© Hitoshi Nagai/Kazuhiro Uchida 2009

2009年8月12日第1刷発行

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
製版———図書印刷株式会社
印刷———図書印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

ISBN978-4-06-276448-3

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。